

日本科学史学会 2022 年度総会・第 69 回年会プログラム

すべてオンラインでの開催となります。

注意：必ず年会特設サイトにて事前登録を済ませて下さい。

紙の要旨集が必要な方は事前に各自ご購入下さい。

詳細や変更については、年会の特設サイトを参照して下さい。

2022 年 5 月 27 日 (金)

20:00-21:00 特別講演：Dr. Marcos Cueto (Fiocruz, Rio de Janeiro) , "The Historiography of Science in Latin America and beyond during the 20th century: perspectives and challenges" (使用言語＝英語)

p.10

2022 年 5 月 28 日 (土)

10:50-13:00 一般講演 1、2 (A 会場、B 会場、C 会場)

14:00-15:00 一般講演 3 (A 会場、B 会場、C 会場)

15:10-16:30 一般講演 4 (長時間枠) (A 会場、B 会場)

17:00-18:00 総会

18:30-20:00 懇親会

2022 年 5 月 29 日 (日)

09:20-11:30 一般講演 5、6 (A 会場、B 会場、C 会場)

12:00-12:50 研究行動規範の前文追加に関する意見交換会

pp.63-66

13:00-16:10 シンポジウム (A 会場、B 会場)

16:20-18:50 シンポジウム (A 会場、B 会場、C 会場)

先行開催 一般講演（オンデマンド）

pp.1-9

5月21日（土）12:00 オンデマンド会場開室（5月29日（日）17時まで年会サイトの掲示板を通じた質疑応答を行い、6月5日（日）24時に掲示板とともに削除）

D11 もう1つの「資源獲得」をめぐる軍官産学の連携— 日本学術振興会による南方薬用植物調査の事例 小林和夫

D12 〈科学と宗教〉の歴史における科学と仏教：サートンの科学史記述より 山田俊弘

D13 文部省学監デヴィッド・マレーの気象観測への関心 財部香枝

D14 教えられた初の富士山頂冬季気象観測 山本哲

D15 東京蚕業講習所由来の蚕児雌雄鑑別模型について ～土田兎四造が製作した国産蠟製模型～ 齊藤有里加

D16 ヒト受精卵研究の倫理問題化の歴史を考える 林真理

D17 日本の核融合研究黎明期における「研究所」に関わる議論の変遷 雨宮高久

D18 カミオカンデ以前：小柴昌俊と非加速器実験の起源 有賀暢迪

D19 ヒュプシクレスの正多面体論（通称『原論』第14巻） 斎藤憲

2022年5月28日（土）一般講演1 10:50-11:50

A 会場

pp.11-13

A11 禁酒運動と新生活運動——敗戦後日本の動向とその系譜 横山尊

A12 流産・中絶胎児の標本蒐集と優生政策の強化—「京都コレクション」を中心に— 坂井めぐみ

A13 特別支援学校における実験遊び—動画を通しての生活科の学びから— 笹谷絵里

B 会場

pp.14-16

B11 計算をしない計算機とコンピュータサイエンス 前山和喜

B12 ソースコード分析とエミュレータによる初期UNIX 発展経緯の解明 石井充*、鷹合大輔

B13 秘密特許を吟味する視点——非自明性 加藤直規

C 会場

pp.17-19

C11 ジョン万次郎とエドウィン・ドレイク、エネルギー大変革の時代～鯨油と石油を求めて～ 溝

畑典宏

C12 19 世紀フランスにおける大衆貯蓄と国家技師 中村征樹

C13 消えゆく画像への抵抗、画像の印刷への野心——19 世紀フランスにおける写真技術 槇野佳奈子

2022 年 5 月 28 日（土）一般講演 2 12:00-13:00

A 会場

pp.20-22

A21 日本の初期総合健診における検査値の判断基準 古俣めぐみ

A22 新型インフルエンザ プレパンデミックワクチン：2008 年の日本 横田陽子

A23 ICRP と放射線審議会による放射線防護の現在まで 瀬川嘉之

B 会場

pp.23-25

B21 コペルニクスとマラーガ学派の天文学の同一性について 荒木裕太

B22 ジョン・ハーシェルと 19 世紀恒星天文学—星の明るさの推定と測定を中心に 渡邊香里

B23 小惑星の族の理論(1922,1927)から平山の 1918 年論文を眺めた時の” probably” の重み 吉田省子

C 会場

pp.26-28

C21 学術研究会議の黎明期における事業：1921-26 年 山中千尋

C22 日本の学術体制史研究 —— 資料整備とその歴史研究 その 5 飯田香穂里*、久保田明子、小沼通二、高岩義信、兵藤友博

C23 冷戦期における日本の科学研究に対する支援活動に関する米政府内での議論 栗原岳史

2022 年 5 月 28 日（土）一般講演 3 14:00-15:00

A 会場

pp.29-31

A31 20 世紀前半の日本による中国大陸での地質学的調査について 加藤茂生

A32 脇水鉄五郎（1867-1942）の人と仕事 矢島道子

A33 シリカゲルのパイオニア・近藤精一 本庄孝子

B 会場

pp.32-34

B31 全国各地の科学授業筆記を探索して読み解く明治期科学教育の実相と教訓 小林昭三*、興治文子

B32 初等物理教育における〈科学を理解する心〉の導入：大正新教育における理科 所澤潤*、赤羽明、高橋浩、玉置豊美

B33 久米邦武論文「露西亜は絵図面の大国」についての考察 福川知子

C 会場

pp.35-37

C31 日本工学会における学会時局対策 夏目賢一

C32 明治初期の横須賀造船所における技術者養成——伝習生の史料から 澤田拓実

C33 日本の大学工学部における初期の女子学生 黒田光太郎

2022 年 5 月 28 日（土）一般講演 4（長時間枠） 15:10-16:30

A 会場

pp.38-40

A41 二つの文化から知の詩学へ：世紀転換期ドイツ語圏における「文学と科学」の間言説的研究 相馬尚之

A42 遺伝学の誕生と化学類推主義——ウィリアム・ベイトソンによる化学と生物学のアナロジー 中尾暁

B 会場

pp.41-44

B41 明治・大正期の物理学者の地震・津波研究——長岡半太郎を中心とした研究者のネットワーク形成の側面から—— 菱木風花

B42 大型プロジェクトにおける個人と組織の役割と相互作用 須山直紀

2022 年 5 月 29 日（日）一般講演 5 09:20-10:20

A 会場

pp.45-47

A51 『実証哲学講義』とはどういう書物で、何のために書かれたのか？ 平井正人

A52 科学理論の包含関係と共約不可能性 山崎正勝

A53 唯物論研究会の技術論と三木清 初山高仁

B 会場

pp.48-50

B51 有馬頼僊の円弧の研究について 武正泰史

B52 陸軍士官学校編『公算学』の成立過程と歴史的評価をめぐる再検討 上藤一郎

B53 『トリシャティーバーシュヤ』における「蔓の同色化」の計算 徳武太郎

C 会場

pp.51-53

C51 第 2 次世界大戦～冷戦初期の英米の「特別な関係」：両国の日本への原子力戦略連携 奥田謙造

C52 日本における素粒子研究所高エネルギー加速器と米国超電導超大型衝突型加速器の機種変更 平田光司*、高岩義信

C53 高速増殖炉の廃止措置の歴史 小島智恵子

2022 年 5 月 29 日（日）一般講演 6 10:30-11:30

A 会場

pp.54-56

A61 食はいかに科学史の問題となるか?—Osiris の特集(2020)から 鶴田想人

A62 普通の言語が写し取るべきもの——ジョン・ウィルキンズ『事物記号と哲学的言語にむけての試論』（1668）における事物の分類 について 柳下壱靖

A63 医学者ガレノスとヒトの生殖発生をめぐる論争史の系譜 今井正浩

B 会場

pp.57-59

B61 イエズス会の日本語宇宙論教科書『スヘラの抜書』の発見とその意義 平岡隆二

B62 18 世紀後半における幕府天文方の紅葉山文庫利用 嘉数次人

B63 オガサワラアブラコウモリ：種としての実存 杉本剛

C 会場

pp.60-62

C61 1920 年代初頭における帝国海軍用真空管の規格制定 横井謙斗

C62 戦時期鐘紡経営多角化の技術史的背景 山根伸洋

C63 第二次世界大戦期の日本軍用レーダー開発、戦後メーザー技術発展における霜田光一東大教授の国際的役割 山田大隆

2022 年 5 月 29 日（日）シンポジウム 13:00-15:30

A 会場 作られた無知の諸相—科学史・社会学・ジェンダー研究の視点から 塚原東吾、鶴田想人、村瀬泰菜、岡本江里菜、飯田香穂里、井口暁、弓削尚子

pp.67-71

B 会場 異なる視点からみたアイザック・ニュートン像を持ち寄る 多久和理実、中島秀人、長田直樹、野澤聡、長尾伸一

pp.72-76

2022 年 5 月 29 日（日）シンポジウム 15:40-18:10

A 会場 仮説実験授業におけるたのしさの発見史 多久和俊明、渡辺規夫、吉岡有文、平林浩

pp.77-81

B 会場 科学的分析を通じて歴史研究をすることで文字資料を超えて何がわかるのか 多久和理実、阿部善也、早川尚志、小西次郎

pp.82-86

C 会場 原発事故後の小児甲状腺がん多発問題をめぐる歴史と現在 ～被ばく影響か否か～ 藤岡毅、日野川静枝、吉田由布子、鈴木元、津田敏秀

pp.87-91